

高齢社員の磨き方

生涯能力開発時代へ向けて――

生涯現役時代を迎え、就業期間の長期化が進むなか、60歳以降も意欲的に働いていくためには、高齢者自身のスキルアップ・能力開発が重要になるといわれています。つまり、生涯現役時代は「生涯能力開発時代」といえます。本企画では、高齢者のスキルアップや能力開発などの取り組み事例を、人事ジャーナリストの溝上憲文氏が解説します。

第5回

立教セカンドステージ大学（東京都）

人事ジャーナリスト 溝上憲文

生涯現役時代だからこそ重要な「学び直し」とは

人生100年時代のなかで、長い職業生活や地域での生活を充実させるための「人生の再設計」の契機となる「学び直し」が注目されている。具体的な学び直しの機会として、大学や専門学校に通う、通信教育やオンライン講座の受講、各種セミナーへの参加、独学など、さまざまな方法がある。そのなかでリベラルアーツ（教養教育）を基礎に「学び直し」「再チャレンジ」「異世代共学」を目的としてシニア世代を対象に開学したのが、立教セカンドステージ大学だ。創設は2008（平成20）年。満50歳以上を入学要件とし、本科（1年）と本科修了後の専

攻科（1年）にわかれ、本科で約1000人、専攻科で約50人が学んでいる。本科入学者は50歳から上は80歳すぎまでと幅広く、平均年齢は62〜63歳。就業している人が約30%、残りは定年を迎えた人や主婦などである。男女比は約半々の構成だ。創設以来、今年で12期目を迎え、修了生も約1000人を数える。入学の目的は「教養・生涯教育」「これからの生き方探し」「人との出会い・ネットワークづくり」などさまざままだ。立教セカンドステージ大学の特徴と学び直しの意義について、同大学の野澤正充副学長（立教大学副総長）はこう語る。「生涯学習講座はさまざまところで開催されていますが、ほとんどが一過性の学びで終わ

ります。本学では1年間を通じて体系的に学び、市民としての教養を高めてセカンドステージに向けた「考え方」を身につけることを目的にしています。大学を出て就職すると、二度と大学に戻ってこないまま引退するのが一般的ですが、いまでは就業環境も変わり、終身雇用も崩れつつあります。リカレント教育※1の意義は二つあり、一つは大学を出た後のある段階でも一度大学で学び直すことで職業のスキルアップを図ること。もう一つは人生100年時代になり、60歳、65歳の節目で今後どのように生きていくかという自分の基軸を見つげるための学び直しです。本学では後者に重点を置いています。さらにファーストステージでつちかかった経験やノウハウを、どのようにして社会に還元してい

※1 リカレント教育……義務教育の終了後、生涯にわたって教育とほかの諸活動を交互に行う教育システム



野澤正充副学長

多彩なカリキュラムと異世代共学で 受講生の価値観を広げる

創立の趣旨にも「受講生が〈自由な市民〉としての生き方を自らデザインできるようにサポートする」と謳^{うた}う。ではどのようにしたら生き方を自らデザインできるようにするのか。同大の教育システムを見てみたい。

一つは多彩なカリキュラムである。「エイジング社会の教養科目群」、「コミュニケーションとビジネス科目群」、「セカンドステージ設計科目群」の三つ（各15科目）があり、自由に選

くか、社会貢献に結びつけていくかということも、本学の大きな目標の一つです」

択できる。教養科目群には「古典として読む旧約聖書」、「東洋思想からの問い」など古今東西の知的財産に加え、「壮年期・老熟期の生涯発達心理学」など、シニア層を意識した独自の科目もある。コミュニケーションとビジネス科目群は、ソーシャル・ビジネス、NPO活動、各種のボランティア活動について実践的に学ぶ。「シニアが輝くライフスタイル」や「修了生が語るアクティブシニアの生き方」などユニークな科目もある。

セカンドステージ設計科目群は、食・健康・住まいなど自分の将来を見据え、生き活きと生活するシニアの「人生設計」の立案を支援する。「食と健康の科学」、「セカンドステージの住まいづくり」、「健康長寿とアンチエイジング」、「高齢者の生活と介護保険」など実用的な科目が用意されている。こうした専門科目以外に必修科目として各教員が毎回違うテーマで講義するオムニバス講義※2「学問の世界」がある。野澤副学長も「現代社会と民法」の科目を担当している。講義の特徴についてこう語る。

「講義は問題を一緒に考えていくスタイルでやっています。これまで法科大学院で教えていましたが、法科大学院では法律家になるための知識の伝授が中心です。本学では知識の詰め込みよりも、むしろ考え方を身につけてほしいと

思い、じっくりと考える素材を与えて議論するようにしています。こちらから絶えず質問し、考えて答えてもらうのですが、社会経験が豊富なみなさんですので本当にいろいろな考え方や意見が活発に出てきます。教える側にとってもおもしろいし、よい刺激になっています」

講義は4時限（15時20分～16時50分）と5時限（17時10分～18時40分）の時間帯に実施される。春学期と秋学期のほか、8～9月には夏期集中講義が行われる。さらに上記の科目以外に立教大学の全学部学生を対象に開講している授業（全学共通科目）も一定の範囲内で受講できる。これを同大では「異世代共学」と呼んでいる。これこそ親子、孫と子ほど世代も違う学生がともに学ぶことで異なる価値観や考え方などを知る多様性を受容する場となっている。

受講生の「気づき」と「発見」を うながすためのゼミナール

2番目の特徴は、すべての受講生のゼミナール参加と修了論文の作成だ。受講生は八つのゼミナールのいずれかに所属し、担当教員の指導を受け、1年をかけて修了論文の作成を目指す。一つのゼミナールの定員は10人前後。教員が出席する本ゼミと受講生だけで運営する自主ゼミが交互に開催され、あくまで受講生の自主的・

※2 オムニバス講義……毎回教えるテーマが変わる形式の講義

主体的活動が基本であり、担当教員は論文テーマの選定や、そのための学習・フィールドワークの方法から論文作成の指導について徹底してサポートする。

野澤副学長は「ゼミナールの仲間と議論すると、いろいろな考え方の人がいることがよくわかります。自分の考えを主張しても必ずしも受け入れられるわけではありません。異なる意見や考え方を知ることによって新たな気づきと発見があり、受講生相互の絆が深まります。シニアになって長い論文を書くことは大変ですが、『論文を書く』という行為は、クリエイティブな活動ですし、『自分とは何か』という自らの内面に迫るものでもあります」と、その意義を語る。

実際にゼミナール参加と修了論文の作成は受講生にとっても得がたい経験となっているようだ。同大に2017年に入学した佐藤勇一氏（69歳）はゼミナール活動についてこう語る。

「修了論文のテーマを何にするのかを決めるのですが、ゼミのメンバーがそれぞれ中間発表し、みんなで批評しながら固めていきます。私は国内旅行をするなかで古い町並みがどのよう保存されているのかに興味をもったのですが、その話を先生にすると、それをまとめてみればどうかと示唆されました。テーマが決まると執筆に入りますが、その内容や文章の書き方

についての指導は非常に厳しく、文章を書くのが苦手な人にとっては1年間苦しんで書き上げることになります。それでもいまままで漠然と興味があっただけの段階から、先生の指導やアドバイスを通じて、きちんとまとめ上げるきっかけをつくっていただいたことに感謝しています」

佐藤さんは本科の論文完成後、専攻科でも論文作成に重点を置き、「日本の近代化遺産」というテーマで論文を書き上げた。「本を読むだけではなく、教室の外でも各地を訪ね歩いて話を聞くフィールドワークを通じて学ぶというイメージをつくってもらった」と語る。

社会貢献活動サポートセンターが 学習活動の継続を支援

3番目の特徴は、受講生・修了生による自発的な社会貢献・研究活動である。その一つの母体となっているのが「社会貢献活動サポートセンター」だ。受講生や修了生が社会との交流や社会貢献活動を促進するために設置され、登録された団体の活動を担当の教員や顧問がサポートする。現在13の登録団体があるが、団体の発足から運営まですべてをメンバーが自主的に行う。例えば1期生から在学生までの音楽好きが参加する「ウクレレ合唱団」は演奏と合唱の練習だけではなく、高齢・障害者施設での公演も



佐藤勇一さん

行っている。そのほかに「かがやきライフ研究会」、「日本に住む外国人を考える会」、「ソーシャルビジネス研究会」など多様な活動を展開している。

驚くのは修了生の学習活動の継続性とネットワークの広がりである。受講して終わりという一般的な生涯学習講座とは異なり、大学での学びを契機に日常的な学習意欲を絶やすことなく継続し、その活動を大学時代に築いたネットワークで互いに支え合う仕組みを構築している。野澤副学長は「千人いる修了生のうち約400人が何らかの研究会に所属し、定期的に活動している。サポートセンターは修了生を社会は予想以上の成果を上げている」と評価する。

また、講義以外に2泊3日の清里合同ゼミ合宿、クリスマスパーティー、修了パーティーなどのイベントがあるが、こうした課外活動は受講生たちが委員会を組織し、運営を行っている。セカンドステージ大学の情報発信の機関誌も受講生で組織する「ニューズレター編集委員会」が取材・執筆依頼・レイアウトまでこなしている。

シニア世代の「学び直し」は 企業の人材育成のヒントになる

このように大きく三つの特徴を持つ同大の教育システムは修了生にどのような影響を与えているのか、佐藤さんに話を聞いた。一級建築士の資格を持つ佐藤さんは勤務先の建築設計事務所代表を65歳で退き、66歳で同大に入学した。入学の動機は「これまでの仕事中心の人生を切り替えようと、仕事のウエイトを抑えつつ学び直そうと思ったのです。もう一つは地元の自治会活動を積極的にやりたいと考えていたので、この大学で社会貢献や地域貢献活動について学べると思いました」という。

大学の講義はどれもおもしろく、市民活動について語る教員の熱意にも圧倒された。そして前述したように本科の修了後、専攻科に進み、2本の修了論文を書き上げた。この2年間に得られたものは何か。佐藤さんはこう語る。

「これまで仕事ばかりやってきた人生に比べ、本当に豊かな時間を過ごすことができましたし、何より学ぶ姿勢を身につけたことが大きな成果です。いまも自身で見つけたテーマについていろいろな本を読むなどして追いかけています。もう一つ自分にとって大きかったのはゼミの仲間と出会えたことです。本科のゼミ員は10人ですが、専攻科が終わったいまでも自主的な研究会を続けています。昨年の研究会のテーマは『色』ですが、仲間がそれぞれ色に関する研究結果を発表し、みんなで議論します。こんな研究ができる仲間はなかなか見つけられるものではありませんし、私にとっては人生の宝です。もちろん研究会後の懇親会も楽しいですが、この仲間と巡り会い、いまも交流が続いており、本当によかったと思っています」

ゼミの仲間には、専攻科を修了後に大学院に進んだ人、別の大学の通信課程で勉強している人、通訳案内士の資格を取得し、美術館で働いている人、NPO法人の立上げに奔走している人など多様だ。佐藤氏も仕事を継続しつつ、土日は自治会活動に参加、その一方、個人では「マシンの老朽化」をテーマに研究活動を続けている。

立教セカンドステージ大学の学び直しの取組みは、少なくとも二つの大きな効果を発揮して

いるように思う。一つめは教育学者の天野郁夫^{いづくお}東京大学名誉教授が「学ぶことにおいて最も身につくのは自ら教えることだ」といっているが、講義を聴く、本を読む以上に自分の意見や研究した成果を発表する機会が随所に設けられていることだ。ゼミ活動における研究テーマの発表などにおいて、考え方の違う他者の理解と共感を得るには、あらゆる検証に耐えうる、人一倍の準備作業と理論の体系化など、テーマの深掘りが求められる。さらに第三者の示唆を受けることで知への欲求をかきたてられ、知性が研ぎ澄まされていくのだと思う。

二つめは、いま企業が社員に求めている「変化対応行動」^{※3}を養ううえで最適な環境を提供している点だ。「知的好奇心」、「チャレンジ力」、「学習習慣」の三つの要素は、変化対応行動に有効であるという研究結果がある（エルダー2019年4月号8頁参照）。そしてこの三つの能力は同質的価値観を共有する社内より、社外の異なる価値観の人と積極的に交流することで磨かれることも明らかになっている。まさに同大の取組みにより、過去の経歴や職歴・社内での役割が異なる人たちがともに学び合うことで知的好奇心や学習習慣が高まることが実証されている。同大の取組みは企業のキャリア教育においても重要な示唆を与えるものとなっている。

※3 変化対応行動……社会の変化に適切に対応していくこと。「知的好奇心」、「チャレンジ力」、「学習能力」の三つが重要となる（本誌2019年4月号特集「佐藤博樹教授特別インタビュー」参照）